

成果と課題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 勝又, 悠太, 尾崎, 弘剛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027142

成果と課題

(1) 今年度の成果

①現実の社会と自分とのつながりを感じられるような題材を開発すること

本年度実践した題材である地理的分野「持続可能な社会をめざしたエネルギーのあり方」では、題材における「社会科ならではの文化」を、日本が直面しているエネルギーに関する問題について、多様な視点や立場から根拠を示しながら対話を重ね、持続可能な社会の実現に向けて、よりよいエネルギーのあり方を見いだしていくこと、と設定しました。題材との出会いの場面で「2019年9月に関東地方を襲った台風15号による千葉の大規模停電の中で生活する住人の映像をしたこと」と「中部電力の方にデータを用いながらエネルギーに関する諸問題についてお話をいただいたこと」という手だては、子どもたちの日常生活と題材で扱う社会的事象を結びつけるきっかけとなったと言えます。子どもたちが題材との出会いの場面で抱いた思いや考えは、「解き明かしたい」「解決したい」という問いを生み出すとともに、問いを追求していくうえでの原動力になることを改めて実感しました。また、追求場面においても『中部電力』『浜松新電力』『静岡市環境創造課』の方から話をいただく手だてをうちました。追求場面で、エネルギー問題に携わる立場の方々から話を聞くことで、教師が準備した資料や自己の調査では見いだせなかった視点や立場に気づいたり、自分の考えの根拠となったりと、子どもたちの対話を深めることにつながったと考えられます。

今年度実践したその他の題材においても、題材で扱う社会的事象や課題に携わる人材を積極的に活用することに重点を置いてきました。3年生の公民的分野の題材「共に創ろうよりよい静岡市」では、子どもたちが感じる静岡市が抱える課題について考えたのちに、『静岡市企画課地方創生推進係』の方から話をいただくことで、自分たちの考えた課題との共通点や相違点、地方自治体としての立場を知る貴重な時間となりました。この経験で得た子どもたちの思いや考えが、多様な視点や立場から政策立案のヒントとなり、誰にとっても住みやすい静岡市の実現や持続可能な都市としての発展をめざした豊富なアイデアが生まれました。さらに、子どもたちが考えた政策を企画課の方に聞いていただき、評価のコメントをいただきました。子どもたちは自分たちの提案を実際に静岡市の方に聞いてもらったことで、達成感を得るとともに自分たちの住む地域を自らの手で創りあげていく意欲や主体性を育むことができたのではないかと感じました。

社会科部では以上のような、現実の社会と自分とのつながりを感じられるような題材開発と授業実践に努めてきました。実践を通して、地域の人材を活用することや社会的事象に関わる方の話をいただくことは、子どもたちの学びを深めるうえで非常に価値があることを実感しました(表1参照)。子どもたちにとって、題材で扱う課題がより自分事として捉えられ、題材を貫く本物の問いが生まれる手だてとして有効であったと考えられます。本物の問いは、より充実した追求活動を生み出す原動力となり、子どもたちが「社会科ならではの文化」を味わう姿につながるものであり、「社会を創る人」へにつながるものであると考えます。

【表1 題材における場面ごとの成果】

題材	授業で招いた人・実際にかかわっている人の声		
	題材の出会いの場面	追求活動の場面	対話で深める場面
・持続可能な社会をめざしたエネルギーのあり方【2年】	・中部電力	・浜松新電力 ・静岡市環境創造課	
・これからの平和主義と安全保障を考える【3年】		・海外に派遣された自衛隊員の語り（映像）	
・ともに創ろうよりよい静岡市【3年】	・静岡市企画課地方創生推進係		・静岡市企画課地方創生推進係
・附中ビジネスプランコンペ【3年】	・静岡市産学交流センター		・静岡市産学交流センター
成果(子どもたちの姿)	<ul style="list-style-type: none"> ・社会と自分とのかかわりを実感する姿 ・解き明かしたい、解決したいという問いをもつ姿 ・追求活動に向けて視点が広がる姿 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えの根拠となるものを得る姿 ・追求活動の中で見いだせなかった新たな視点に気づく姿 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会と自分とのかかわりを実感する姿 ・自分たちが社会にかかわっているという実感をもつ姿 ・新たな問い（解き明かしたい、解決したい）をもつ姿

②社会へ提案・構想する授業，未来志向型の授業実践

これらの授業実践の他に，2年生の地理的分野「訪日外国人に日本の地理を紹介しよう」では，子どもたちが日本はどのような国か意外と説明できないという思いを発端に，「海陸・山川の分布」「気候」「交通」「産業」の四つの視点から訪日外国人にも伝わる日本の地理を紹介するパンフレットをつくる活動を行いました。3年生の公民的分野「附中ビジネスプランコンペ」では，経済分野の学びを活かすためとして，静岡市産学交流センターの方を招いて起業講座を行い，ビジネスプランを立て提案する活動を行いました。いずれの授業実践も，子どもたちの学びが教室内に留まるものではなく，実際の社会への提案や構想，これからの私たちのあり方を問うものであったと考えられます。さらに，これらの提案構想は，自分の考えの根拠となる資料を見つける調査の時間を十分に確保することで，実現可能性や持続可能性を考慮した提案が生み出されました。授業の中で見られた子どもたちの姿は，単に社会的事象を説明したり評論したりする姿ではなく，積極的に社会に参画したいという思いを発信したりする姿でした。このような「社会の中でどのように生きるか」について問い続ける子どもたちの姿は，育みたい人間像である「社会を創る人」と言えるのではないのでしょうか。

(2) 次年度への課題

本年度，授業実践を重ねていく中で見えてきた課題は，子どもたちが問いを追求していく中で語り合っている場面での教師のふるまいや手だてです。多様な視点や立場から対話が展開されていく中で，子どもたちの発言をいつ（タイミング），何を，どのように焦点化し，問いの解決に向けて対話を促進させていくか考える必要があります。題材で味わってほしい「社会科ならではの文化」を念頭に置きながら，どのような姿を見たいのか，題材のまとめの場面でどのような姿を願うのかを明確にし，題材構想を考えていきたいと思います。